「矢代幸雄と大和文華館」展によせて（その 2）

矢代幸雄：芸術を愛する心

大和文華館の初代館長を務めた矢代幸雄（1890―1975）は、国際的な立場において活躍した稀にみる美術史家といえます。その生涯に幅広い交友関係を持ち、文化行政や文化財保護、美術研究所や美術館の設立など多岐にわたる事業に携わり、そして、膨大な著作や文章を残しており、これらをすべて捉えることは至難のわざともいえます。一方で、矢代の文章は自身について率直に綴られており、その実直な人となりをうかがわせてくれます。そこからは、美を楽しみ、愛することの喜びを常に自身の軸としていたことが伝わってきます。

実際、矢代幸雄は芸術を愛することが自らの喜びであることを繰り返し述べ、研究者であることを自認しながらも、芸術を研究対象としてよりも自らの喜びであるとさえ主張しています。時系列を追って矢代の文章を見ていくと、実に様々な場で、あらゆる対象に対して、自らの感覚で芸術に触れ、喜びとすることを勧めています。矢代が芸術とどのように関わってきたのか、展覧会では具体的な作品とともに見て行きますが、ここでは、矢代が数多く残した文章の中から2つ引用してみたいと思います。はじめは欧州留学の集大成として1925年初めにまとめ上げた『Sandro Botticelli』第1版の序を取り上げます。

「これは芸術の書である。芸術は人間の胸に訴えかけるものである。（中略）私はボッティチェルリを愛し、彼について研究した。それ以上でもそれ以下でもない。私は自分の喜びを書き留めた。他の人々がこの喜びを共にするよう、いやむしろ他の人々が自身の眼を開き、それぞれの好みのままに芸術からより大きな喜びを得られるようにと、書き留めたわけである。私は本書が純粋に学問的な頭脳の持ち主よりもむしろ、美を愛する点で趣味性向を同じくする人々に届くことを願っている」（訳文は吉川逸治・摩寿意善郎監修『矢代幸雄　サンドロ・ボッティチェルリ』岩波書店　1977年より）

本書は研究書でありながら、矢代は「芸術の書」と述べており、ボッティチェリの絵画作品を研究対象というよりも、自らの喜びの対象として捉えています。同時期、1925年に刊行された『太陽を慕ふ者』（初版本　改造社）では、ロンドンやパリから太陽の暖かいイタリアを目指す時の心情に、より直接的に記されています。

「南が恋しい。そんならば、何故早く行かないのだ。研究のためには、北の現代文化の中心地にとどまったのがよいと言うのか。お前は研究に来たのか、それとも生命の泉を尋ねに来たのか。学問のために来たのか、それとも芸術のために来たのか。（中略）お前がフロレンスへ行って「マニフィカットの聖母」*に逢うまでは、そしてまた「春」（プリマヴェラ）**の花園に三人の乙女（グレーセス）と一緒にあのゆるい線の踊りを踊るまでは、お前の淋しさは癒るまいよ」

* サンドロ・ボッティチェリ「マニフィカットの聖母」フィレンツェ・ウフィツィ美術館

** サンドロ・ボッティチェリ「プリマヴェーラ（春）」フィレンツェ・ウフィツィ美術館（図1：展覧会では実物大の複製を展示）

この一節には、研究者よりも芸術の純粋な享受者でありたいという、若き日の矢代の芸術に対する熱情がぶつけられているように感じられます（図2：留学中の矢代幸雄、1921年　イタリア）。

日本への帰国後、矢代は日本・東洋美術へと鑑賞および研究の対象を広げ、また安田靫彦や小林古径、平櫛田中、梅原龍三郎など同時代の作家との交友を深めていますが、彼らの多くは原三溪のもとでともに東洋古美術を鑑賞した仲間でもありました。

1950年代に入って刊行された大和文華館の季刊雑誌『大和文華』では、創刊号から連載する『歎美抄』において、矢代の東洋美術への愛着が綴られています。

また、同じ頃に矢代は郵政審議会専門委員を務め、昭和26年（1951）に日本電報通信社から出された『郵政』（第3巻・第4号）4月号に「美を愛する心」と題する随筆（図3）を寄せて、芸術だけではなく自然美についても大切であることを述べています。このほか、前年の昭和25年（1950）には『郵政』（第2巻・第3号）3月号に「手紙随筆」として、イタリア留学中にはボッティチェリやレオナルド・ダ・ヴィンチの研究に没頭し、帰国できないことを日本で待ちわびている老父母に伝えることが忍びなく、手紙を出さず、また父の没後、長い間母からの手紙も封を切らずにいたことを後悔していることを吐露しています。

その一方で、矢代は著作の中では幾度も自らを研究者、学者としてよりも芸術家の方が向いていた、と述べており、また実際に絵を描くことを好み、留学中に、イタリアで滞在していたアルノ河沿いのホテル ベルキエリ（Hotel Berchielli）からの眺めを澄んだ色合いで描いています（「フィレンツェ、アルノ河畔図」1921年頃　水彩　個人蔵）。

近畿日本鉄道（現・近鉄グループホールディングス株式会社）の社長であった種田虎雄と矢代幸雄の構想から生まれた大和文華館ですが、矢代の中の美術に対する幅広く、深い愛着と研究者としての探求心、そして何より、芸術を愛する心が、美術を心地よく鑑賞する場としての美術館、大和文華館の具体的な姿へとつながったといえるのではないでしょうか（図4：1961年、バーナード・リーチ氏・富本憲吉氏とともに三彩立女俑を愛でる）

芸術を愛する喜びが生まれる場所として、大和文華館が続いていくことの大切さが改めて感じられます。

（瀧朝子）

図1

図2

美を愛する心

矢代幸雄

図3

図 4

季刊 美のたより No.230
令和７年 ４月 ４日
発行 大 和 文 華 館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.